

JAMの主張

新たな一步を踏み出そう 仲間のための組織「JAM」の実現に向け

【機関紙JAM 2019年11月25日発行 第250号】

「令和の時代初めての年末に向けて、街頭イルミネーションがあちこちの街で点灯し始めた。2019年。この一年は、JAMにとっても、これまでにない経験を積み重ねた年となった。

「JAMの組織内国会議員」の復活をめざした、夏の参議院選挙での敗北。候補者は、二年間にわたり日程を一日も変更させることなく、全国を駆け巡った。

TANA会の開催、カードの集約、定着点検など、これまでに引けを取らないボリュームの活動を全国の組織が展開した。

しかしながら、結果としての得票は積み上げることができず、私たち自身の組織力が思いのほか低下しており、定石を打つだけでは事足りないことを痛感させられた。

自然災害が多発。とりわけ、何十年に一度の勢力を持つ台風が次々と日本列島を襲い、河川の氾濫や長期間に及ぶ停電など、思いもよらない災害が次々と発生。広範囲に及ぶ甚大な被害をもたらした。10月の台風19号災害では、JAMの仲間の住宅被害は1000件を超え、11月末となっても操業を再開できない事業所も複数残っている。

僅かなものであるが、JAM38万人の助け合いであるハート共済が、被災された仲間の心の支えになっている。個人共済の加入があれば、さらに安心が広がることになる。「助け合い」が私たちの運動の原点にあることを忘れてはならない。

労働条件における規模間格差の是正は、JAMの組織的な命題であり、2019年春闘でも一定の成果を上げた。賃金の引き上げ幅だけではなく、水準を重視したJAMの取り組みは、労働界に広く理解されるところとなり、連合の2020春闘方針は、これまで私たちが訴えてきた考え方が多く盛り込まれるものとなった。

JAM結成21年目となる2020年。次の10年を見据えて、確実な前進が必要な1年となる。

この1年間の経験で得たものをしっかり胸に刻みこみ、力強く、しなやかに活動を展開する、仲間のための組織「JAM」の実現に向けて、新たな一步を踏み出そう。

副書記長 椎木盛夫